

1994年度研修部会報告（東松山研修室）

柴田敏夫

（東松山研修室室長）

1. 東松山研修室の概要

①東松山研修室（以下、松山法研と称する）は、91年（平成3年）度のコース制採用以来、入室生の増加を見、本来の目的に向かって前進してきている。これも、はるばる東松山の地まで出講して下さる諸先生の多大な御協力の賜物と感謝する次第である。さらに、諸先生の、法的知識を得させようという熱意、加えて知識の習得のみならず、「法的ものの考え方」をも習得させようとする心の表れと感じている。学生側にも、その熱意・心を真摯に受け止め努力している者も暫増している。ことに外部講師の先生方には、体験に基づく身近な受験指導をしていただき、この面からの、良いプレッシャーや責任感が学生の中に流れている。この気持ちがいままで継続するかで、合格への遠近が測れよう。

また、他方では基本的概念・知識が確実にものになっていないという批評も耳にする。基本書の読み方の問題であろう。それは読む回数にもよろう。ほんの2～3回読んで終わりにしてしまうようでは、万事不確実なままで終わってしまう。択一式・論文式の模擬試験などは、確実性を確認する有効な手段の1つである。これを今年度は実施できなかったので、次年度は実施したいと考えている。

②平成6年度は、12月に桐鵬会という学生組織もでき大いに意気があがってきている。研修生と兼ねている者もいるが、やがてお互いにライバルとして切磋琢磨し、司試や国Iに合格者を輩出できるように努力してほしい。そのための環境づくりを今後実施していきたい。というのは、5号館で週2～3回、放課後に楽器の練習が入り、じっと読書をし思考を行う研修生にとって騒音を聞いているに等しい。これを次年度以降、大学当局と協議していきたい。また平成7年度新入室生を迎えるにあたって、新2年生の机の数では不足を来す事、目に見えている。もう1部屋増をお願いしていくことも課題の1つである。それには、少なくとも研修講座の成果が、択一合格ないし正規の授業の結果（成績）に表れるようでない、申請するにもしにくい。研修生の発奮を求めるものである。それを考えると、今の学習態度はきわめて手ぬるい。研修室を単なる物置場・談話室にしているに過ぎない。このあたりを改善していかないと合格は延びることになる。

休暇の利用方法も再考すべきである。休暇に帰省しても着実に予定をこなしていけるよ

うに各自、年間計画をたてて学習していくべきである。今は、それを実践している者は少ない。

③研究所の特別事業として、講演会や特別講義などを企画したが、時間の浪費とばかり出席しなかった者もいた。このような企画は遅効性のもも多く、社会人になってから効き目のあらわれるものである。このような企画には大勢が参加して、将来のために備えてほしいものである。論文試験などで、人間性を表したり、表現に幅を出したりするのも、日頃このような人格形成・知識集積の結果である。目先の利益ではなく、もう少し遠くを見て人生設計をしてほしい。次年度も、このような意図での企画を研究所単独もしくは共催で開きたいので、多数参加されたい。

2. 研修室の整備・利用状況

①94年度新入生は熱心に研修室を利用する者が多かったが、徐々に、先述したように物置場のようにしている者も見えだした。また、1年次生が多数の机を使用しはじめたため、2年次生は机を使用できないなどの異変が起きている。しかし前述のように物置場のようにしている研修生も表れてきたことを考えると、使用状況を見て入替えを行うなどの必要もでてきた。簡単な方法は、隣室の確保であるが、先述したように早急な実現は困難であろう。今後この点は大学当局と交渉を継続していくことを次期担当者をお願いしたい。

「開室時間」については、午後8時頃までの利用につき、大学側の内諾を得てある。もし必要ならば所長名で大学側に正式文書で上申することも考える。さらにまた、最後まで利用していた学生が、第三研究棟の警備室に研修室の施錠依頼をすることになっているのであるが、これも先輩からの申し送りはないようである。朝夕の研修室の錠の開閉は、学生証ないし研修生証明書と交換に前記警備室から鍵を借りて行うことになっているが、朝早く来て自分で開錠するほど熱心な学生がいないのでこの点はよいが、帰りは自分達で施錠することの依頼くらいは実施してほしい。

②「科目の開講時間」については、正規の授業終了後という制約があるため、4時限目などに時間割りを組むのはむずかしい。正規の時間割ができあがらないと研究所の時間割が組めないのである（講師の先生方の出講日などの関係もあって）。今年度は研究所のカリキュラムを変更した年でもあり、受講時間や科目において錯綜してしまった感がある。1・2年共通で受講できるはずだったのに、正規の時間割との関係で2年次生が受講できないなど、不都合を生じたこともあり、重々、反省している。